

ルカ 2 章 6、7 節 「・・・マリヤは月が満ちて、男子の初子（ういご）を産んだ。そして、その子を布にくるんで、**飼葉桶**に寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。」

飼葉桶は ルカ 2 章 7 節、 1 2 節、1 6 節、1 3 章 1 5 節の 4 回聖書のなかに記されています。

よく「イエス様は馬小屋でお生まれになられた・・・」と昔から、言われていますが、でも実際はどうなのでしょう。実は馬は闘いの時に活躍をします。牛、ロバは農業の働きの爲に必要とされている平和な動物です。ですから、一般庶民の家には馬小屋はなく、この場所は平和な動物の爲の家畜小屋であったと思われます。

さて、この家畜小屋がどんな材料で造られて、どの程度の広さであるかわかりません。この家畜小屋は客間ではないことは誰にでもわかります。もちろん臨月の妊婦を迎え入れるような場所でもありません。

----- 混乱していたベツレヘム -----

3 節「人々はみな登録のために、それぞれ自分の町に帰って行った。」

さて次に、当時のこの町の様子を想像してみましょう。とにかく混乱していました。今、世界各地から住民登録のために人々は集まって来ています。懐かしい故郷に帰って来た人々は、めったにないチャンスです。幼なじみと交友を暖めていました。会いたかった親戚のみんなから彼らの最近の暮らしぶりを聞いたりしました。又ある人々は商用に忙しく働いています。小さな子供たちは興奮して走り回っています。そんな中で民族独立の志士たちは、ひそひそとなかにか会合をしています。宗教家たちは勢力拡大にやっきになっています。

----- 全くの無関心 -----

ですから、このような人々は、まもなくあかちゃんを生もうと心配をしている夫婦のことなんか全く見えていませんでした。今、誰も、一人の子供の誕生に関して関心もなければ、気にかけて心配をしてくれる人など、この町にはいませんでした。住民登録するためにやって来た人々で町はごったがえしています、とにかくみんな忙しいのです。他人のことなどかまっていられないのです。

実は、そんな人々の無関心、排斥の中で今、イエス様は静かに誕生されるのです。そういう意味で、まさにイエス様は人々の無関心の中、余計な者として、退けられながら生まれてきたと言っても良いでしょう。

----- イエス様との距離（人間って勝手ですね） -----

さて、私たちと、イエス様との距離について考えましょう。それは、家の客間、居間からずっと離れた庭の片隅にある家畜小屋の距離と言ってもよいでしょう。つまり、人間は昔も今もイエス様を家畜のように粗末に扱っている、ということなのかも知れません。多くのクリスチャンはイエス様を信じていながら、いつもイエス様と一緒に住まおうとは思いません。だからと言ってイエス様を遠くに離しておいては何かの時に不便です。ですから、そんな時には手が届くような所に、つまり、生活が乱されない程度の近い距離にいて欲しいと思っています。人間って勝手ですね。

----- 今もイエス様を家畜小屋においやっている私たち -----

ヨハネ 1 章 10, 11 節 「この方はもともと世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。この方はご自分のところに来られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった。」

この様に私たち、日常生活の中で、イエス様を無視して、抜きにして生活をしている時がよくあるのではないのでしょうか。たとえば、

- ・私たち、イエス様を客間に入れようとはしません。
- ・家族団らんなど、日常生活をするところにイエス様を招こうとはしません。
- ・友人たちとの心地良い会話、夕食のテーブルにイエス様を招こうとはしません。
- ・又、イエス様が、そんな所に入ってきて、すぐに追い返してしまいます。
- ・イエス様がその場にいたたまれなくなってしまうようなことをしています。

日本では、家の真ん中に仏壇が置かれています。

でもイエス様は家畜小屋なのです。

----- 私たちの心に、生活の中に入りたいと願っておられる主 -----

しかしイエス様は、そんな私たちの家の中に、更に私たちの心の中に入って共に生活をしたいと願っておられるイエス様です。

マタイ 25 章 35～40 節 「・・・あなたがたはわたしが・・・旅人であったときに宿を貸し・・・てくれたからです。」「いつ、旅人であるあなたを見て宿を貸し・・・てあげたでしょうか。王は・・・答えます。」「・・・これらのわたしの兄弟たち、それも最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです。」

ですから今、お迎えしましょう。イエス様を私の心の中に、そして我が家の真ん中にお迎えしましょう。あの、ザアカイのように。

ルカ 19 章 5, 6 節 「イエスはその場所に来ると、上を見上げて彼に言われた。『ザアカイ。急いで降りて来なさい。わたしは今日、あなたの家に泊まる事にしているから。』」ザアカイは、急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた。」

----- 飼葉おけのイエス様 -----

では、次に飼葉桶の中のイエス様を見つめてみましょう。「飼い葉おけに寝ておられるみどりご・・・」の消極的な意味と、積極的な意味について学びましょう。

①消極的な意味。 ----- クリスマス、主イエス・キリストは私たちの所に目だたない様に、そっと静かに、隠れたお方として来られたということです。見ようとしなければ見ずにすみ、聞こうとしなければ聞かずにすんでしまう様なお方として来られたのです。

イエス様の誕生の知らせはどのような方法でなされたのでしょうか？ 場面は夜です。誰もが眠りにについている静かな夜更けです。空から天使が羊飼いの前に現れました。そして、天使は当時最も身分の低い羊飼いに向かって語られたのです。それはスピーカーで、かなりたてる様ではなく、これでもか、これでもかと強引に押し付ける様でもなく、そっと静かに、でも羊飼いたちの心に届くように語られました。求めている人にはよくわかるように語られました。クリスマスの夜、私たちは静かに、イエス様が私たちの所に来てくださったお話を聞きたいですね。

キャンドル礼拝にぜひお出かけ下さい。

②積極的な意味。 ----- イエス様の誕生は王宮ではありませんでした。家畜小屋でした。その場所は、この世界の王の王である方には最もふさわしくない場所の様に見えました。しかし、世界中の人々、誰もがイエス様とお会い出来る場所は王宮ではなく、家畜小屋だと思います。なぜなら、王宮では一部の人しかイエス様にお会いできません。でも飼葉おけが置かれている場所、家畜小屋だったらどうでしょう。つまりほんの少し誰でも謙遜になれば誰でもお会いできる場所、それが家畜小屋でした。

そういう意味で飼葉おけに寝ておられる救い主の救いとは・・・・・・。

・世界中のすべての人々の救いです。救われなくて良いと言う人はひとりもおられません。それは、

- ・家畜小屋のような場所に宿を取らなければならない貧しい者の救いです。
- ・家畜の様に扱われているみじめな差別されている者の爲の救いです。
- ・家畜小屋の様に臭気に満ちている所に住んでいる人々、すきま風が吹き抜ける所に住んでいる人々、他の誰からも関心の払われないような孤独の中に生きている人々の救いです。

・イエス様の救いは、権力を持たない者、貧しき者、知恵亡き者、奴隷のような者たちの救いなのです。そしてその、代表者は羊飼いです。

----- 羊飼いたちの救い -----

マタイ 5 章 3 節「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。」

そしてついに、その家畜小屋、飼葉おけ、その場所で羊飼いたちは、イエス様と出会いました。彼らは心が貧しかったからです。

----- 東方の博士たちの救い -----

(マタイ 2 : 9~11 節、読む)

更に東方の国から博士たちもやって来ました。博士たちもまた、貧しい心を持っていたので、イエス様とお会いする事が出来ました。

さてこの博士たちには実は 3 つの不足していたものがありました。

- ・第 1 に、地位と名誉はありましたが平安がありませんでした。
- ・第 2 に学問と知識はありましたが、確信がありませんでした。
- ・第 3 に、倫理・道徳に通じていましたが、愛する力を持っていませんでした。

今、博士たちは幼子の前にひれ伏しました。その時わかりました。この方こそ救い主であることがわかりました。自分たちに欠けているものも満たして下さる方であることがわかりました。なぜわかったのでしょうか？

・それは、もちろん、超自然の星が彼らを導いてくれたからです。

・もう一つは、彼らが求める真理に対して貧しい心、つまり謙虚さを持っていたからでした。求めているも、導かれていても、謙虚さがいないために真理をつかめない人もいます。

今、博士たちには勝利がありました。宝物を捧げて帰る博士たちの表情は、はればれとしていました。

第 1 テモテ 1 章 1 5 節『『キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた。』ということばは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。』

誰でも人間は神様から罪赦されて、そして神様と和解して、始めて平安を得て、幸福になれるのです。人間として誇りをもって生きる事が出来ます。

----- キリストと出会い、伝える -----

ルカ 2 章 1 6, 1 7 節「・・・そして急いで行って、マリアとヨセフと、飼葉桶に寝ておられるみどりごとを**捜し当てた**。それを目にして羊飼いたちは、この幼子について自分たちに告げられたことを**知らせた**。」

さて最後に、 私たちがどうしてもしなければならないこと、それは  
④、「**探し当てた**」、イエス様と**出会う**ことです。どこで、・・・。それは私の家畜小屋、私の飼葉桶です。。心を貧しくして始めてイエス様とお会い出来るのです。今年のクリスマスいろいろなことをしても、一度もイエス様にお会い出来なくて終わってしまったとしたらこんなに残念なことはありません。

今年のクリスマス、あなたの心でイエス様を感じて下さい。

④、更にもう一つは「知らせた」。あの羊飼いのように、私たちもキリストを伝える者になりたいですね。  
「・・・それを、見たとき、羊飼いたちは、この幼子について告げられたことを知らせた。」

今年のクリスマス、一人でも多くの方々に、キリストを伝え、いただいた恵みを分かち合いましょう。

クリスマスは愛が満ち溢れている季節です。  
クリスマスは貧しい者がお金では得られない平和を受ける季節です。  
クリスマスは 謙遜な者が大きな祝福をいただける季節です。

天使の賛美です。「いと高き所で、栄光が神にあるように。  
地の上で、平和が、みこころにかなう人々にあるように。」ルカ 2 章 14 節

今年のクリスマス、あなたも主イエス様を心から讃えて下さい。

#### ——— クリスマスに見た夢 ———

こんな話があります。ある牧師がクリスマスの日に夢を見ました。夢の中のクリスマスは妙に静かなクリスマスでした。家中どこを探してもツリーもリースもありません。当然、あるはずのキャンドルも見当たりません。家の外に出ました。ところが、毎年この時期に聞こえるはずのクリスマスキャロルの歌声も聞こえて来ません。町中が静まり返っています。悲しみを抱えたまま彼は家に戻りました。

しばらくした時、玄関のベルが鳴りました。ドアを開けると一人の少年が涙を一杯浮かべて立っていました。「お母さんが死にそうです。お祈りしてください。」お医者さんには手の施しようがないと言われたそうです。

牧師は聖書を片手に急いで駆けつけました。せめて天国の希望を語ってあげるつもりでした。ところが聖書を開くと、どのページも真っ白。希望を語れないまま悲しみと挫折感を抱 (いだ) きながら家に戻りました。その時目が覚めました。

最初に彼の耳に飛び込んできたのは賛美の歌声でした。窓を開けると町中の歌声が聞こえました。彼はその時、知りました。賛美のない世界がどんなに寂しいものか、人の心を暗くし、絶望の淵に落とされるのかを・・・。